

# 宗教とはなにか

東京工業大学教授（社会学）  
橋爪大三郎

人間の知性が限界に挑戦する試み

## はじめに

宗教とはなにか？

などと、ふだんあらたまつて考える機会はありません。

宗教なんて、自分にはあんまり関係ない。

うっかりはまると怖いから、近づかない。それなのに、宗教について実はなにも知らない——これが平均的な日本の高校生、大学生ではなからうか。

お葬式や結婚式のときにお世話になるのが宗教だと、日本人は思っている。だから、それ以外の場所に宗教が現れると警戒する。

こういう日本人のあり方は、世界的にみると、特別である。欧米でも、イスラム諸国でも、インドでも東南アジアでも、世界中ほとんどの国々で、宗教は日常生活にすっかり融けこんでいる。

このことに気づけば、宗教とはなにか、半分ぐらいわかったようなものだと言ってもいい。

世界各地の宗教がどんなものかは、ほかの各章にゆずるとして、ここではそもそも、人間であることと宗教とはどんな関係があるのかについて、いっしょに考えてみたい。

## 知性ある生物として

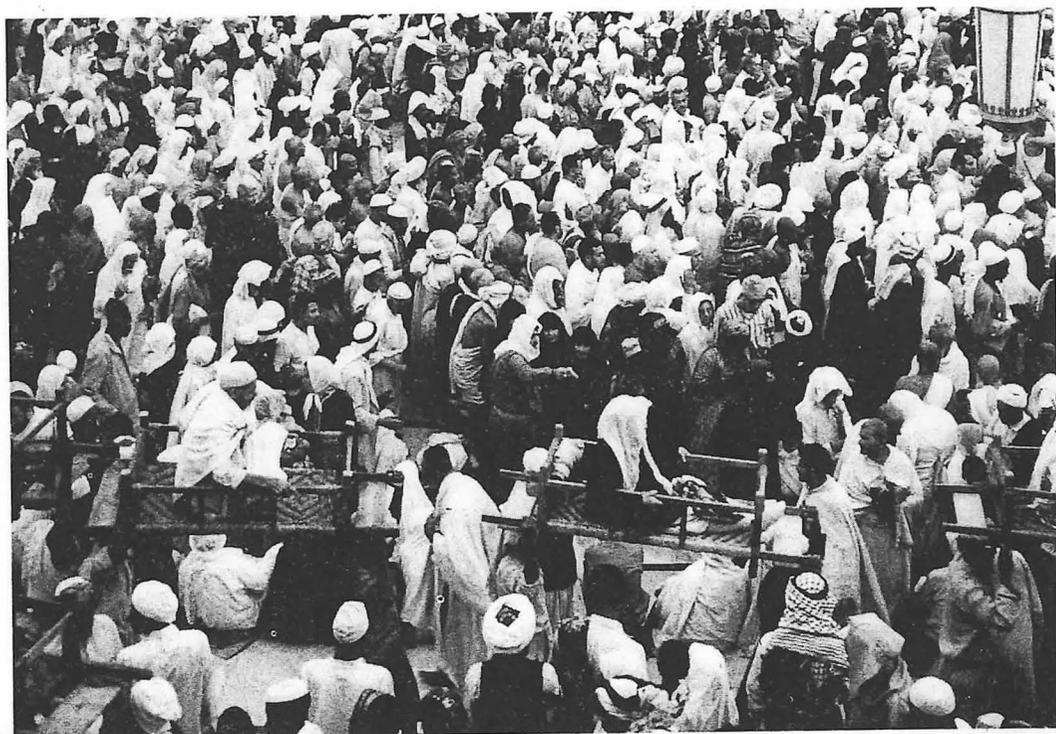
まず、思考実験をしましょう。

ある惑星に、知性のある生物が住んでいます。

この生物は、知性があるから、脳もある。二本足で歩いて、手も頭も、男女の区別もある。結婚して子どもが生まれたり、年をとって死んだりしている。人間と似ている？ でもよその惑星の、人間とは別の生物です。

さて、この生物は、その知性を使って、何を考えるだろう。

生きるためには、食料が必要だ。そこで、この惑星の自然環境をかなりよく認識しているはずである。食べられる動物や植物はどこにあるか。水はどこにあるか。そういったた



巡礼に集まったイスラム教の信者たち

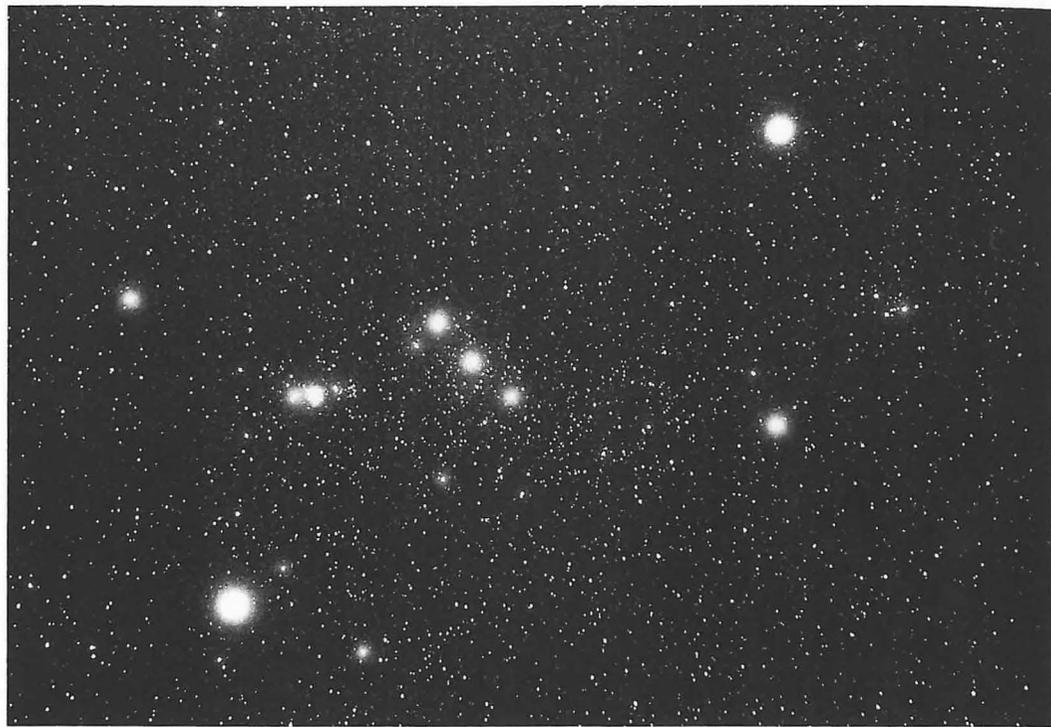
くさんの、実用的な知識。

そのほかに必要となるのは、この生物の群れの掟や、親子親戚関係、先祖についての知識であろう。やっつけていいこと、いけないこと、他の群れについての情報や、いろいろな言い伝えについても知っているにちがいない。

これだけのことを知っていれば、さしあたり生きてはいける。

けれども、彼（女）が知的な生物なら、これ以外のことも、きつと考えてしまうはずである。たとえば、自分はやがて死ぬだろう。そしてこの世界から、いなくなってしまうだろう。自分はどこから来たのか。そしてどこへ行くのか。自分は何のために生まれてきたのか。この世界は、いったいどうして存在するようになったのか。などなど。

こうした疑問は、考えなくても生きていける。そして昼間、皆といるあいだは忘れていられる。でも誰もが、ふとした折りに、必ず考えてしまう疑問である。知性のある生物なら、きつとそうだ。



夜空にまたたく無数の星々（写真提供／JTBフォト）

それにはそれだけの、理由がある。知性は、生きていく個々の個体の活動である。ところが個体は、必ず死んでしまう。これは、多細胞生物の宿命である。

大腸菌のような単細胞生物なら、分裂を繰り返して、同じ構造のものが永遠に生きつづける。細胞分裂と生殖の区別がない。

多細胞生物は、生殖して子孫を残したあと、親の個体はやがて滅んでしまつて、同じ構造（個性）のものは二度と現れない。知性も、脳とともに滅んでしまうのだ。

知性は、やがて滅んでしまう自分とはなんだろうと考える。

けれども、この問いは答えられない。死んでしまった知性に、死んだらどうなりましたかと聞くわけにはいかない。死んだ知性は、知性として存在しなくなっているからだ。死は知性にとって究極の、最後の未知の世界である。

自分の知ることのできないことを知ろうとすること。これが、知性の知性たるゆえんで

ある。夜空にまたたく無数の星々が従える惑星のなかに、知性をもつ生物があちこちに隠れているとして、かれらはみな、この問いを考えているに違いない。この意味で、人間は決して孤独ではない。

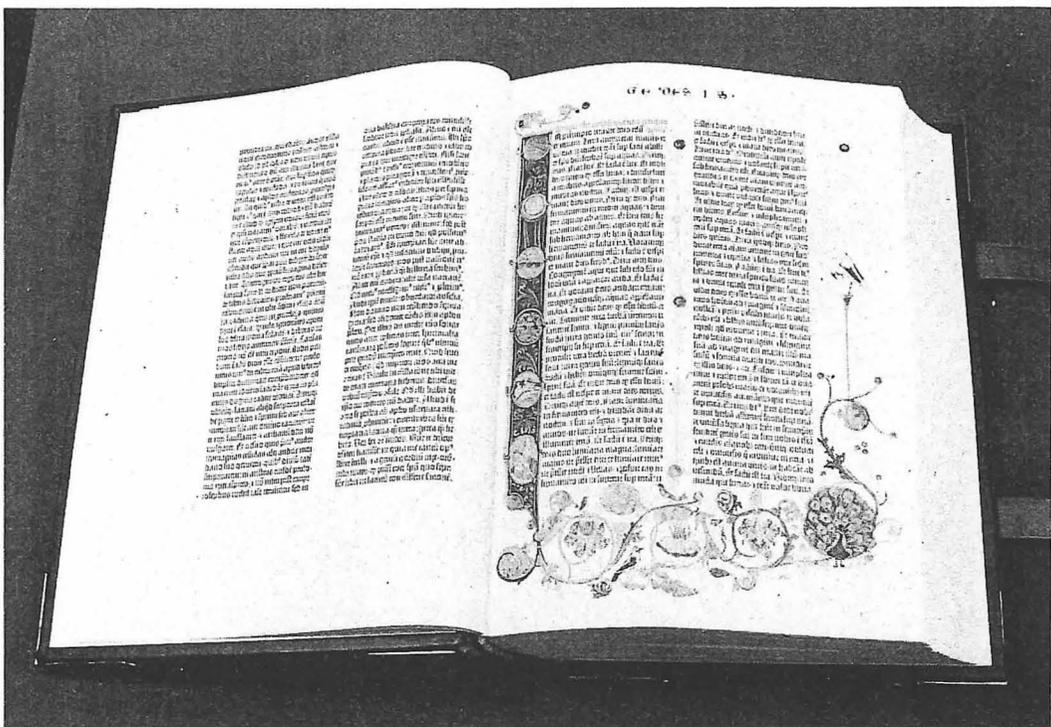
### ● 社会で生きる価値と意味

人間は誰もが、自分は死ぬと知っている。知っていないが、それでも生きていく。これは、知性をもつ生物なら、必ずそうあるあり方である。と同時に、知性をもつことの、誇りでもある。

このことは、人間と人間のつながりにも反映する。

人間は誰もが、無力な幼児として生まれる。そのあと成長して、いったん自立しているようにみえる時期を過ぎたあと、最後は年老いてひとの世話になりながら死んでいく。

もしも人間が死なないうえに永遠に生き続けるのなら、他人にかまわず自分のことだけを考



「聖典」(ゲーテンベルク「42行聖書」レプリカ)

える、まったくのエゴイストとなることもできよう。けれども人間は、やがては死ぬ、ひ弱な存在である。互いをいたわり助け合うことなしに、生きていけない。

知性があるから、人間はこのことをよく理解できる。社会は、弱肉強食の自然状態ではない。人間が、互いに大事にしあう、秩序ある交流の空間である。

社会は、このように組織されるものなので、その内部は価値(大事なこと)や意味(そのわけ)が満ちている。そうした価値や意味は、人びとが共同で支えている。あなたが生まれる前から、そうした価値や意味はもう存在していた。あなたが死んだあとでも、もつと後の世代の人びとによって受け継がれていく。

そうした価値や意味なしには、この世界も知性も成り立たない。そして、知性が減んだあとでも、その舞台であるこの世界は続いていく。あなたは、有限でひ弱で小さな知性として、この世界のまんなかにぼつんと取り残されているように感じる。

あなたは、あなたがこうしてぼつんと存在することに、いったいどんな価値や意味があるのかと、なおも考えようとする。

### 究極の法則と最高の知性

社会を満たしている価値や意味は、私やあなたや、個々の知性が自分で考えついたものではない。知性が活動しはじめたときには、もうそこにあった。なぜそこにあったのか。それは、自分ひとりの知性のはたらきでは説明がつかない。それは、ほかにも知性がたくさん存在している(いた)ということなのか。もしれないが、その始まりまでは考えきれない。

考えきれないことを、さらに考えようとする。それには、工夫が必要である。

たとえば、この世界が、ある偉大な知性の手で設計され、製造されたと考えてみる。

それなら、世界が価値にあふれ、意味に満たされているのは当然である。そして、世界

は製造されたのだから、始まりがあり、終わりがあふ。それを製造した知性は、世界の外側にあるのだから、始まりも終わりもない。

この偉大な知性を、神(God)とよぶことにする。すると、一神教である。人間は、神に製造された被造物である。人間は、何のために生まれたのか。人間は死んだらどうなるのか。そういったことを知りたければ、神が何を考えているかを知ればよい。神が何を考えているかは、神の声を聞いた人(預言者)の話の聞けばよい。預言者の話は「聖典」(バイブルやコーラン)にまとめられているから、それを読めばよい。

このように、偉大な知性の考えを理解できる人間の知性も、それなりに偉大であると言えないだろうか。こう考えて、人間は知性の誇りを手にする。

またたとえば、この世界が、永劫の昔から究極の法則に従って運動していると考えてみる。すると、この世界には、始まりも終わりもない。

世界も人間も、変化していくようにみえるが、実は変化していない。究極の法則は変化しないからである。

変化していくものは、現象である。価値も意味も、人間の生命も、変化していく。だから現象にすぎないのだ、と理解すべきである。究極の法則を理解することが、人間の知性の最高のあり方である。そんな知性のあり方は、人間の生死を超越して、究極の法則と一体化している。

この究極の法則を、法(ダルマ)とよんでみる。また、最高の知性を、仏(ブツダ)とよんでみる。すると、仏教である。人間は誰でも、知性をもっている。それを最高のあり方に導きさえすれば、誰でもが仏(ブツダ)になれる。究極の法(ダルマ)がどのようなものであるかは、仏(ブツダ)の言葉をまとめた経典に書いてある。

またたとえば、この世界は、過去を単に再生産しているのだと考えてみる。過去を忠実にたどることが、人間にとって最高のあり方

である。知性は、過去がどのようなであったかを、よりよく理解しなければならぬ。この世界を成り立たせている価値も、意味も、過去の世界によって支えられているからである。過去の世界の価値や意味は、過去の理想的な知性によって運用されていた。

この知性を、聖人とよんでみる。すると、儒教である。聖人がどのように、この世界の価値や意味を運用していたかは、四書五経に書いてある。それを読んで、読みぬいて、自分も聖人と同じように行動する。それが、望ましい知性のあり方である。そして、現在の世界の価値や意味を、そのままつぎの世代に伝達することが、人間のつとめである。

### 日本人の宗教観

いくつかの例をあげた。これらは、知性をもって生まれた人間が、考えられることの限界に挑戦する、いくつかの試みであり、工夫である。

こうした工夫は、人びとの共感をよび、人びとに共有され、大きな運動となって広がってゆく。人類の歴史をひもといてみると、知性が限界を超え、考えられないことを考えようと苦闘してきた歴史でもあることに気づく。そのような苦闘なしに、人間は自分の存在理由を確かめることができなかった。そして、価値にあふれ、意味に満たされているこの世界が、そのようであつてよいのだという確信をもつことができなかった。誇りある知性として、自分を肯定することができなかった。宗教は、このような試みである。そして、文明の原動力である。

文明とは、人間が森や草原と共生するのをやめて、自然に手を加え、農地を耕し、都市を建設することをいう。社会は急速に変化し始め、複雑となり、文字と歴史が生まれる。人びとは自然から切り離され、都市に集まり、人工的な環境のなかで、この世界の過去とゆく末とを考えたのだ。

それ以前の人びとは、自然と共生し、自然



仏典が編纂されたヴェーサーリ (第2回仏典結集の地)

